

文様構成による変遷を考えてきたが、今回は主に、本遺跡の出土例に拠ったため、他の遺跡の出土例とは異なった様相を呈するかもしれない。

初期段階や2段階では、空白を埋め尽くそうとする意識が働いていたようであるが、撲糸圧痕の意匠に種々の文様が施文されはじめた段階から空白部が多くなり、短線圧痕に替わる圧痕もその間隔が広くとられるようである。また、これに反して、肉厚の隆帯を多用したものは、前段階のように密集した文様を展開している。このことは、文様構成上の何らかの規範が緩和された時点でのより自由な方向を指すものと、従来の構成に立脚した上で、さらに発達させようとする二者が存在した可能性が考えられる。

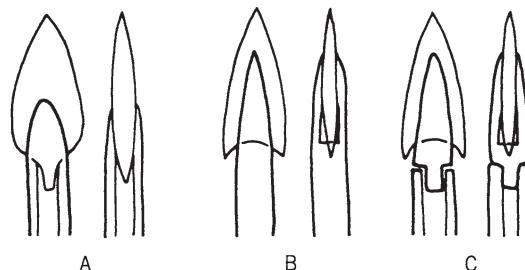
アスファルトの付着のみられる石鏃の着柄について

定形石器中でもっとも多く出土した石鏃の中で、32点にアスファルトの付着が観察された。これは総点数350点中の約1割にあたり、この時期、アスファルトが、相当量流入していたものと考えられる。出土資料の中で付着痕の認められるものを集成図にした。

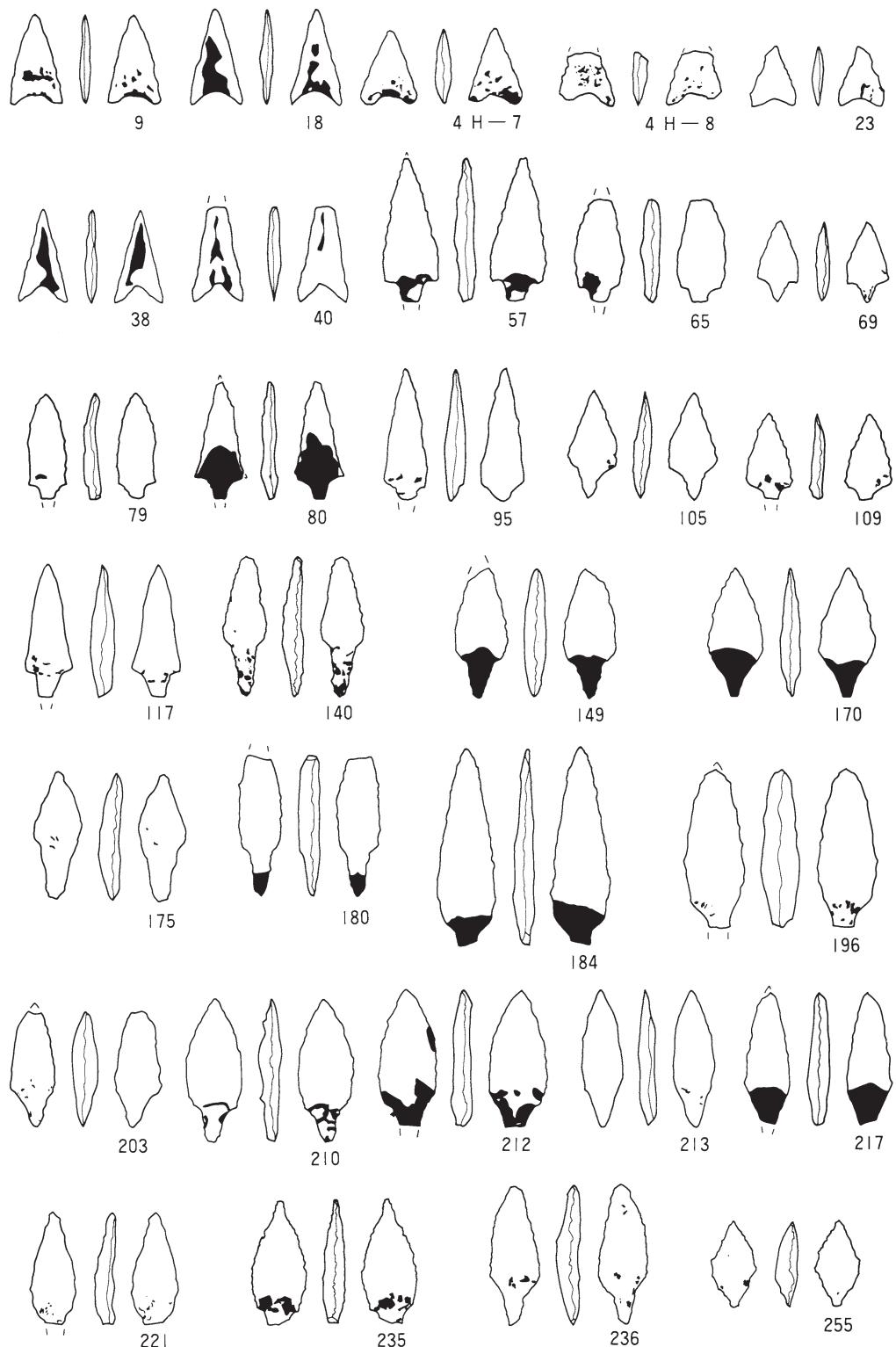
アスファルトは、石鏃と柄との着装時の接着剤と考えられる。付着範囲は、当然のことではあるが、茎部の有無で大きく異なっている。付着の残存率の高い数点での比較では、無茎鏃は18・38・40にみられるように、器体の先端まで及んでいる。これに対し有茎鏃では149・170のように、茎部及び基部のみに付着がみられ、完形品では茎部端まで及んでいるのが観察される。

これらの付着範囲から、着装法を推定してみた。ただ、すべての鏃の装着にアスファルトを使用したとも思えないことから、接着剤を伴わない装着法の存在もあったものと考えられる。本稿では、単に付着範囲からの推定である。

まず、柄の材質としては竹管が考えられ、矢柄研磨器と推定される石器の例からも妥当と考えられる。特に、本県では円筒土器以降に圧倒的に出土率の高くなる有茎鏃においては、中空であることから、装着に最も適している素材と考えられる。逆説的にいえば、竹管が柄として



着柄推定模式図



アスファルト付着石鎌集成図

最も有効であったために、これに合わせて有茎鎌が発達したとも考えられなくもない。

有茎鎌の装着の場合は、中空である竹管の先端部にスリット状の切り込みを設けて安定させ、さらに先端部を先細に加工した物と考えられる。また、切り込みにより柄の本体に亀裂が入らないように、細身の紐などで補強していたものと考えられる。

無茎鎌の場合は、他県で数例確認されているように、根挟みの存在が挙げられる。この場合も、柄は根挟みの形状から中空の素材への装着が考えられる。また、根挟みを介在としない直接的な装着も考えられるが、対象物に当たった際に、有茎鎌よりも柄の切り込み部分に潜り込む可能性も考えられる。この場合、逆に根挟みの存在から、細身の木材など竹管でない素材を柄として、直接切り込みを設けて装着した可能性も否定できない。

装着法の推定例を模式図にした。Aは有茎鎌の装着、Bは根挟みを用いない無茎鎌、Cは根挟み使用の装着である。

最後に、前述の有茎鎌の発達については、柄との関係においての推察であって、対象物の違いによっての使い分けや、ダメージの強弱などについての要素はまったく含まれていないことを付記したい。